

(最優秀おはなしエンジェル賞 中学生の部)

オレンジ色の海

中二・田中 麻美

「いただきます」

三人分の声が響く。四つの椅子。四人分の食器。でも人数は三人。ちらりと横をみると僕よりもあきらかに小さい影が居心地の悪そうに身を縮めている。八年間、変わらない。

八年前、僕の妹――ちいちゃんが死んだ。僕の目の前で、車にはねられて。

小さな体は大きく跳んで、僕の目の前に降ってきた。

どうしようもなく小さくて、泣きたいくらい冷たくて、そしてなにより、なにより、どこか痛くて悲しかった。

その日から、うちの家族は、少し壊れた。

父さんは、一日中、仕事をするようになった。周りが心配して家に帰されるようになって、家に持ち帰って部屋にこもった。休日も会社に行って、趣味も一切しなくなった。

母さんは、四人分の料理をつくり、ちいちゃんの洋服を買い、何もなかったかのように振る舞うようになった。最初は少し戸惑ったが、食器や服のサイズが大きくなるうちに、父と僕はもう何も言えなくなった。

一つ一つはとても小さな異変だけど、そのとき小さかった僕は、とても怖かった。何度も泣いた。

そんな時、僕は味方を手に入れた。

それは、僕の影を乗っとして、はしゃいで笑って、とても楽しそうだった。

小さなその影は、十七になった今も、僕の側で生きている。

「おい辰也、元気ねえじゃん」

せっかくの昼休みを邪魔してきたのは、愛しき友人、シダである。今年同じクラスになったばかりというのに、持ち前のフレンドリーさと、前向きというより前しか向かずにつっこけるような性格で、初めの一日で友達をゲットするという人見知りには羨ましい種類の生物だ。ちなみにゲットされたのは僕であり、「シダ」というあだ名はあえて名前ではなく苗字の石田からとったのは人見知りの分かりにくくささやかな意趣返しだ。何の意趣返しかは分からない。残念ながら。

「なあ、海行かね」

うわ、面倒臭そう。

「やだ。無理。海汚いし、皆うるさいし、なにが悲しくて男二人で水平線眺めなきゃいけないの」

「いや、別に悲しくなくても眺めていいと思うが……。沈む夕日とか眺めようぜ。毎年手えつないで行ってたろ」

「お前とトモダチになったのは今年に入ってからだし、手とかもう誰との思い出を語っているか分からないがやめてくれ」

「お、友達とか嬉しいじゃないか」

「一体君の耳は何をしているのかな？」

夏産まれのコイツは七月に入ってから異様にテンションが高い。

と、何を間違えたか近くにいた東さんに話しかけて、拒絶されてい

た。「ちょっと話しかけないで。その会話に入ったら、馬鹿になる気がするわ」

僕も馬鹿の一員に見えているのか。ひどい。話につき合っただけなのに。

「お邪魔しまーす」

というわけで、我がモンスターは、その週末、家にやって来た。あれからあのテンションのままゴネたモンスターはなにを企んだのかいきなり「辰也ん家海の近くだよな、行っていい？」と言いながらなぜか交換済みの母の電話に電話をかけ、許可をもぎとるという早業を披露した。実に有能である。

「で、なんで昼食までご一緒しようとしているのかな、君は」

狙ったかのように昼食の十分前びつたりに来た友人に放った言葉は母に一蹴された。

「あら私が呼んだのよ。せっかくだからごはんも食べに来なさいって」

横に視線を向けると、椅子がいつもより一つ多い。なんと、根回し済みか。

全く。実に有能である。

そんなことを言いつつ、味方のいないことに気づいた僕と母と有能なモンスター・シダは、食事の準備を始めた。

影をみてもちよっと楽しそうで、その後も休日出勤を禁止された父も含めてみんなで食卓を囲んだ。正直、すごく楽しかった。

くだらないことで笑い合い、会話もはずむ。こんなに明るい食卓は、いつぶりだろう。昼食もこんなに美味しかったっけ。なあんで。

そんなベタで痒くなるようなことを考えてた。

ふと、シダがちらちら僕の隣の席を盗み見ていることに気づいた。あっと思った。

隣の席——ちいちゃんの席である。

確かに、四人しかないはずなのに五人分の席があったら驚くだろう。いや、椅子ならば何かしらの説明はつく。でも、だれもいない席におかずやらなんやらが置いてあったらさぞ不気味だろう。

楽しいなんて、とんでもない。もっと抵抗しておけばよかった。

別に、シダに「変だ」と言われることが嫌だったんじゃない。ただ、マトモな人が現れて、第三者の目が現れて、自分たちがこの状況を「変だ」と感じてしまうことが、たまらなく恐くなったんだ。

こんなに明るい食卓は、いつぶりだろう、なんて、ちいちゃんが生きていた時ぶりだ。

もう慣れたはずなのに。変だって思われるのも、変だって自覚してしまうのも。

ずっと理解しているつもりだった。でも、改めてつきつけられると、痛い。

そんなことを思いながら口にしたおかずは、砂のような味がした。

シダは、結局、空いた席を気にしつつも、何も聞かなかつたし、何も言わなかった。

僕の家から歩きで約三分。自転車で約一分。普通に歩いても近いが、地元のやんちゃなガキども、いやお子さまが新たに（勝手に）開いた海までの道を案内すると（子供が自分達しか知らないと信じているものは、大体大人は知っているし、時々便利に使っているものだ）こつちが驚くほど目を輝かせた。

「この道だったら走って十秒位で着ける！」歩いて一分位だよ。こ

んな足場の悪い所で全力疾走しないでよ。

なんてことを思いながらも、声に出さないのも、ちよつとまださつきの傷をひきずっている。

「おい元気ねえじゃんか。海はもう目の前。今テンション上げないでいつ上げるんだよ」

シダの目はさつきから輝きっぱなし。そんなに、きれいな海でもないし、水平線は途中で途切れてる。でも、そんなきれいな心に、どこか僕は救われている。

「なあ、シダ。いきなり悪いけど」

「ん？」

「うちってさ、前、妹いたんだよね」

「うん」

話したいなって思ったのは単なる偶然で、そのきれいな心にほだされたのかもしれない。海を前にテンションが上がったのかもしれない。そんな僕を見て、影が嬉しそうに笑った。「交通事故でね、車にはねられて。ちいちゃんっていうんだ」

遠くで小さい子をつれた家族が遊んでた。その家族の形が、酷く遠く感じる。

「多分、それから立ち上がって、家族の絆を、とかって言うのかもしれないけど、うちは見事に立ち直り損ねた。もう、一生立ち直れないかもしれない」

シダは黙ってる。僕は自分の小さな影の輪郭を指でなぞる。

「今日はありがとう。父さんも母さんも楽しそうだった」

そこまで言うともう話すことがなくなってしまう、シダを窺っても、俯いていて表情は分からなかった。

「……あのなあ」

やがて、聞こえたシダの声は、怒っているようで、拗ねているみたいで、泣く一歩手前のようにも聞こえた。

「一生、なんて言うなよ。立ち直れない、なんて思うなよ」

すごくベタだ。なぐさめって感じのなぐさめ方だ。心のきれいなコイツだから出来るなぐさめ方だ。でも僕は気付く。誰かにこうやってなぐさめてほしかったって。

だって今、凄く、嬉しく感じてる。

「こんな重要な事はもっと早く言えよ。教室で馬鹿話したり東に怒られる暇あるならさ」

いや、東さんに怒られていたのはシダだけな気がする。でも、

「……立ち直れるかなあ」

「当たり前えだろ！」

語彙力がないからベタな言い回ししかできず、聞いている方が恥ずかしくなるような台詞を吐くモンスターは、果てしなくポジティブで、そこが、僕の胸に沁みる。

子供のはしゃぐ声がしてそちらの方向を向くと、海に真っ赤な夕日が溶ける所だった。

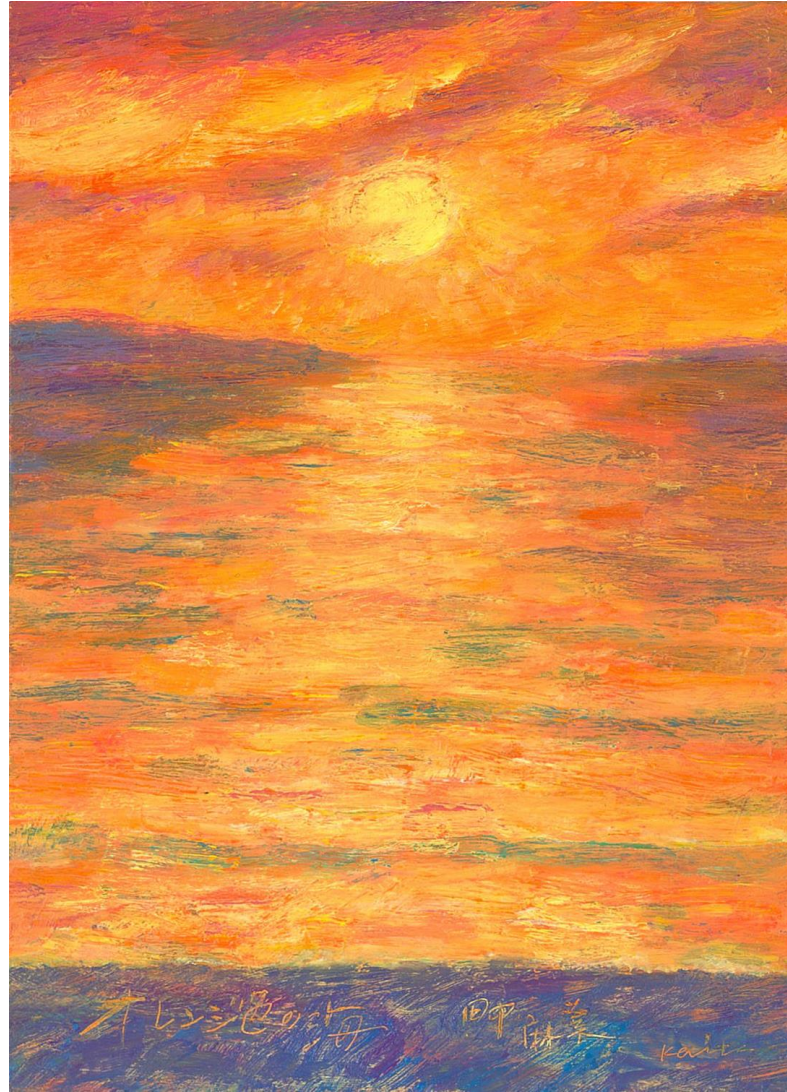
遠くの家族はとても遠くて、かすかに輪郭が見える程度だったけど、きつと、同じ方向を向いている。同じ夕日を眺めている。

「夕日、きれいだな」

うん。きれいだ。

オレンジ色の海が、どこかぼやけて見えたのは、気のせいだ。

砂浜に何滴か、水滴が落ちたのも。



画：阿部海太
